

「自然の中で育む、遅く大きな命」



とても身近で、見慣れた光景である「牛や馬たちの放牧」。

西ノ島町の基幹産業の一つ、畜産業で行っている「放牧」には理由があり、歴史があります。

自然の中で育てる、独特の飼育法やこれからの畜産業の課題等を「自然の中で育む、遅く大きな命」というテーマに沿って、紹介します。

西ノ島町における畜産業の起源

西ノ島町の畜産業は、放牧を活用した肉用牛馬の生産です。その起源は「牧畑」と呼ばれる隠岐独特の農業経営方式にあります。

牧畑とは、土地を四つの「牧」に区分し、地域毎の共同管理の上で行う放牧と畑作を組み合わせた四圃式農法で、確立されたのは江戸時代と言われています。

1960年代後半には牧畑での畑作が姿を消すことになりましたが、町が管理者となり旧牧畑区を公共牧野と位置づけ、現在の放牧の形になりました。牛馬の放牧というと、まず国賀海岸、赤尾、鬼舞を思い浮かべると思いますが、公共牧野の「牧」は町内に19ヶ所あり、それぞれに名前が付けられています。ちなみに国賀海岸は由良牧、赤尾は赤尾牧、鬼舞は長尾牧と呼ばれ、牧毎に牧柵で区分されています。

この19ヶ所のうち現在使われているのは、12ヶ所で、成牛が約600頭、馬が約50頭、放牧されています。

繁殖経営

本町の畜産は、一般的に、雌牛を育て種付けをし、子牛を産ませ、その子牛を浦郷家畜市場で売却し、収入を得

る「繁殖経営」と言われるものです。

そして、市場で買われた子牛は肥育され、島根和牛や最近では隠岐牛として日本各地で親しまれています。



隠岐の牛が高く評価される理由

国賀海岸などで見られる放牧風景は、本町に暮らしている人であれば見なれた景色ですが、他のほとんどの地域では、牛は牛舎の中で餌を与えられ育てられます。牛舎の中で育てられる牛も、もちろん運動は行いますが、そのような環境で育てられた牛を隠岐に連れて来て放牧しても餌を食べることができないと言われています。

体重500キログラムの牛が急斜面で踏ん張りながら草を食べるといのは、それだけ難しく、体力や足腰の筋力が必要です。生まれた時から餌を求め、斜面を登ったり下ったり、時には走り回ったりすることで身についた、隠岐の牛ならではの特色と言えます。

足腰が強く餌をよく食べる牛というのは、肥育する上でも喜ばれ、市場で高い評価を得ています。

隠岐家畜市場

ある時期になると別府港などで、トラックに積み込まれたたくさん牛たちを見ることがあると思いますが、隠岐では1年に3回（3月、7月、11月）家畜市場が開催されます。

本町の畜産関係者が一同に集まり、100頭を超える子牛が売買される雰囲気には緊張感があり、国賀海岸でのんびりと草を食べる牛を見るのとは違った畜産の一面を垣間見ることができます。

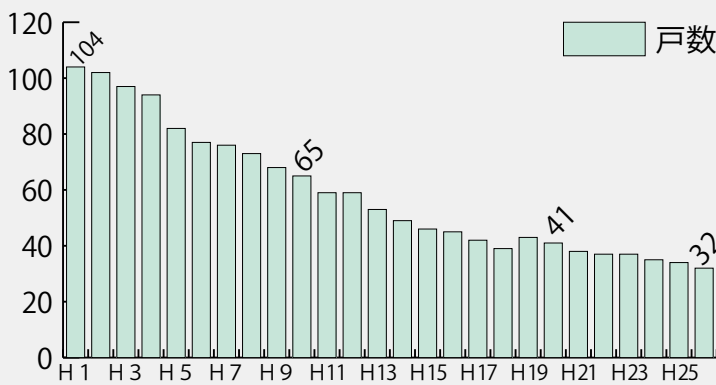
子牛の価格に関しましては、ここ数年好調を維持し、昨年11月には過去10年で最も高い価格となり、1頭あたり平均約46万円の値を付けました。



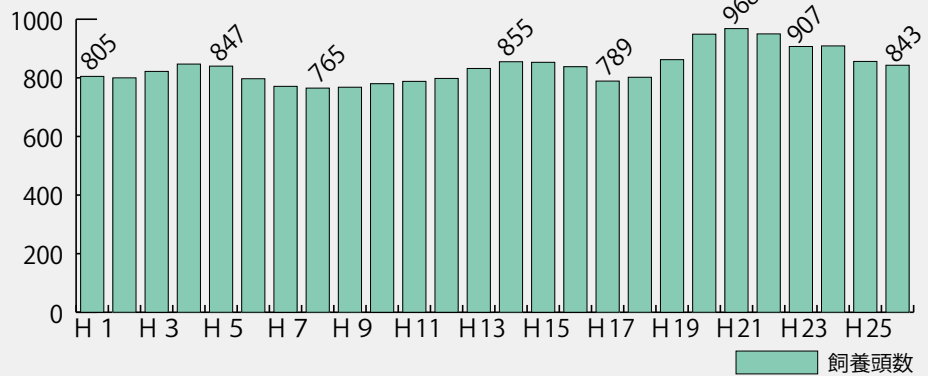
新たな担い手の育成・確保

現在、畜産農家の数は町全体で32戸です。この数は年々減少傾向にあり、農家の高齢化と後継者不足が問題となっています。現在は多頭飼育の農家が多くなり、飼養頭数の減少は抑えられています。このまま農家の数が減少すると、現状の頭数を維持するのは困難となります。そして、将来的には市場の存続も危ぶまれ、畜産業自体衰退していくこととなります。

西ノ島町の畜産農家戸数の推移



西ノ島町の肉用牛飼養頭数の推移



今後、農家の減少を抑え、飼養頭数を維持・増頭するために、放牧場の整備に加え、農協及び畜産農家と町が協力し、新規就農者の受入体制を整備することが喫緊の課題となっています。

今後、西ノ島町での新規就農をお考えの方へ 簡単FAQ

Q、放牧は誰でも出来るの？

A、西ノ島町が管理している公共牧野では、西ノ島の住民なら、放牧料を払えば、誰でも放牧ができます。

Q、未経験者でも畜産経営は出来ますか？

A、新規で始め、現在かなりの頭数を飼っている農家さんもありますし、不可能ではないと思います。

農協をはじめ、西ノ島町、島根県も一体となり、出来る限りのお手伝いをさせていただきます。

Q、就農体験などありますか？

A、現在、就農体験などの募集は行っておりませんが、要望があれば、畜産農家さんと検討し、可能な限り実施いたします。

【お問合せ先】

西ノ島町役場 地域振興課

農林水産係（7） 8777